

曲亭馬琴著

傾城水滸

傳第十編

歌川國安画
上帙卷之上

13
3087
31



壹

微軀此書を新作して嘗彼の故事を宣和遺事録に宋
 江ホ二十六将昇其益あり林沖あり然るに水滸傳の作者その書成
 作出る及びて昇其益あり天罡地煞の員内在るものよりて是を補ふ
 子頭とてして其益彼昇其益と梁山泊の巨魁とらども宋朝の故の遇
 老曾市頭を陣殺して便是の賊首とてその終を取れるもの宜く
 二百零八の列星中在るむべし脚色の如くして宋江を前轍を
 踏むとて天罡第一星とらるる嫌ひあり今這傾城水滸傳を胡蝶の
 則昇其益あるもあれを二百零八の勇婦中在るめて最後の一枝花茶
 慶小擬する一人を省たり何ぞして任するをさるる凡九百八勇婦ハ三
 世姫小仕るに比皆是義小仗中忠を倡て水滸の百八賊とあるは身が
 所云初善中惡後忠の差別を始よりて宋江ホと異なりとのあれハ

又金瑞が外書と看るる李達と柴進が綽號を評して旋風云云此
 義を説く第十回その言理ありふ似れど身がわたりて其を
 辨論するれども寸楮小盡まゝもあらねども後々の編よりの水滸傳
 第四十九回より宋江そび祝家社を打つ條を看るる扈三娘ハ生拘ら
 ざるも眷属の本李達が殺され然るに三娘ハを梁山泊に引て
 宋公明の媒妁せられ遂に王英と夫婦ありて尚ある如くその勇あ
 りあるの抑不孝の女子とて是より先宋江ホが謀て霹靂火
 秦明の妻子を死地成就せし明の花栄の妹とて妻せし趣向同じ
 魔の取らるるの事とて其の事とて聊勸懲を合せ今何ぞ
 諄々いふとも看官先刻より業知るべし

文政十三年庚寅春正月吉新坂 曲亭馬琴識





目も去み 挿桃 飛子 樂老 紙

舞の



紙老 飛子

呉藍山桃

まがたていふ



夏虫乃火むふ 照射の

ふけ 深山



女貞木 袖垣

水馬津 渾津

まがたていふ



上
不見就鳥
巖居

馬山尺

篔簹糸の長蛇恨
心くく
心くく
心くく
心くく

蛮女面
渡橋

ナカカキハシ一冊



胡沙丸
蒼海原

星乃
月之眉
春秋の富心
煙
祭





年代記児童講譯

初編全五編
當年上梓

山東庵京山作

此稗史ハ神代のむらさき
補ひありのろくろのり
のそよあさりめて童子の
のれたるたよりともなる
るんあさりて

御祝儀日童講譯

全部上冊

山東庵京山作

此稗史ハ正月の松を始
はつりうけのりま
のそよあさりて
のれたるたよりともなる
るんあさりて

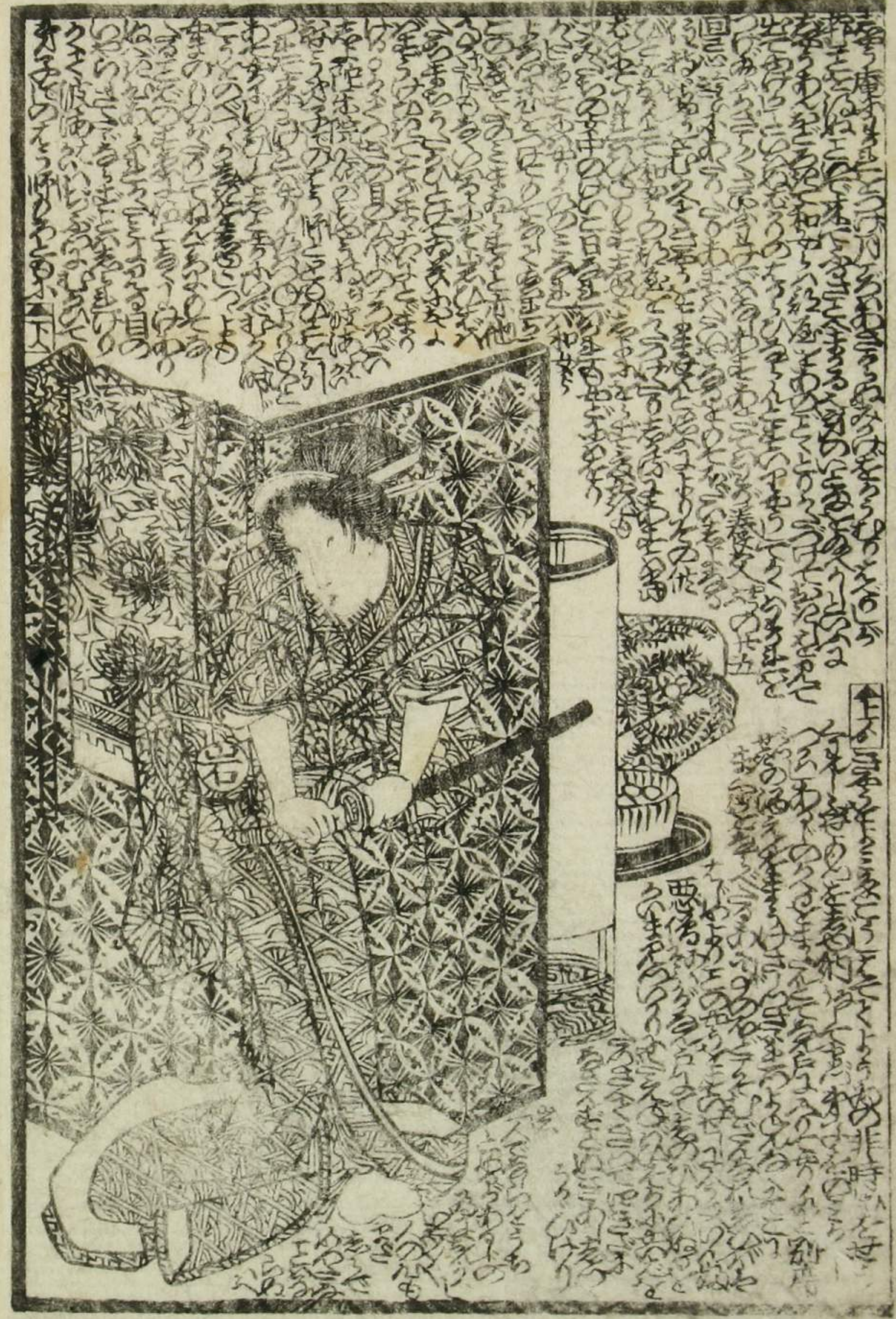
奉獨稽古

中本

全一冊

山櫻樓連々合作

此の書ハ春と夏の
のそよあさりて
のれたるたよりともなる
るんあさりて



戲場顯微鏡 上帙二冊 彩色 默々老漢隱著 歌川國貞畫

此は戲場考古博覧の諸子著述する新劇の重なりとのも皆故実
監觸のミとあてて着す観るの規則をあるをせしめたるの故也
つらり考らうとも其居のこけまくりの物いかにあつてよく考ら
おのり功たるともあつた三枚をその意地考すの致すありあは

本朝 繡像 艶容女仙外史 初編 五冊 默々老漢隱翻案

この書の唐山の逸史を著せし妙案を奇しく考らうとす
記するに唐の華を著せし妙案を奇しく考らうとす
のりは他り唐の華を著せし妙案を奇しく考らうとす
つていそは油亭翁の輯み効ありのり看官の誌君子とす
おひく次編もんあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

顯微鏡 萬邦劇場談 上下 默々老漢隱著

この初編のまじりて唐の華を著せし妙案を奇しく考らうとす
すは戲場考古博覧の諸子著述する新劇の重なりとのも皆故実

澗澤篁民著

迎福南鍼録

一名相宅手引草 全部五冊 近刻

右同著

雅俗百傳一奇

大本全五冊繪入 平假名附 近刻

右三重長遠板板仕の通油町書林 仙鶴堂小林喜右衛門印行

迎福南鍼録の書手は正月一巻五冊小
盛平の汗をまきし法は初編の爲に
を解しては三巻の抑の書協紀辨方重
つてか位相神效走遊の要領を著し
の迎福南鍼録を述べて宗と示し
の字を讀んで其意を不辨のりとの
のり大凡一家の主人の常小坐
凶悔の惑るるは日用有無の良
此の重刊雅とる俗とるその行状
列傳之輯録として勸懲の一端と
義利尚氣節操の世に振れりとの
技藝好事のりとのりを得る小
是併善言のりとのりをして欲
善人善言のりとのりをして欲
續とるのりとのりをして欲

